

2. 研究ノート

学校教育におけるジェンダーの問題に関する一考察 —ジェンダートラックと隠れたカリキュラムに注目して—

A consideration of gender issues in school education —Focusing on gender track and hidden curriculum—

竹繁諒真*

抄 録

本稿では、先行研究からジェンダートラックと隠れたカリキュラムに注目し、学習者がそれらに、どのような影響を受けるのか考察した。結果、ジェンダートラックと隠れたカリキュラムは個々の因子ではなく、相互に関係する可能性を示唆した。特に、隠れたカリキュラムについては、教員が再生産するものと学習者自身に内在するものがあり、学習指導要領や学習教材などが影響する。他方、ジェンダートラックについては、隠れたカリキュラムを受けたことで進路選択をトラッキングしてしまうことで、ジェンダートラックが表面化し学習者は生れながらの性に影響されて進路を水路づけてしまう可能性があることを示した。

Keywords: 教育社会学, 進路選択, 学習指導要領, ジェンダートラック, 隠れたカリキュラム

1. はじめに

女性が求められる社会での役割は時代とともに変化してきた。特に、今日の様な大衆教育社会⁽¹⁾におけるメリトクラティック(個人の実力を重視する)な社会において、求められる女性像は大きく変化してきた。これは、学校教育も例外ではなく、近く社会にはばたく学習者を支援する教育機関としての役割は、必然として変化してきたと言える。しかし、進路選択においては、必ずしもそうとは言い難い現状があった⁽²⁾。これは、一部の側面において今日、過去の産物と言われるかもしれないが、教育が広く開かれ共生が叫ばれる今日において見逃して良い問題ではないと考える。

本稿では、必然として変化する学校教育に注目しつつ、学習者の進路決定に及ぼす問題を検討する。その足掛かりとして、学校教育における学習指導要領や学習者を取り巻く環境に注目する。その理由は、様々な社会的ニーズに対応しながら学校教育が変化してきたためである⁽³⁾。このことから、時代における性に関する認識が学校教育において、如何に変化してきたのかを示すとともに今日、学校教育に関係する者がどのような問題に留意すべきかを指し示すことにしたい。

また、本稿ではその際に、進路選択と学校のカリキュラムという二つの柱で考察する。それは、学習者の進路は性ではなく本人の能力と資質に基づき決定され、かつ本人の意思が重要であるとする立場のもとで、学校という枠組みにおいて存在するカリキュラムが進路選択にどのような影響を与えているかを検討するためである。具体的な手続きは次の本稿の構成による。まず、小論「Ⅱ. ジェンダートラックとは」にて、これまで論じられてきたジェンダートラックによる進路選択の影響性の概略を示す。他方、小論「Ⅲ. 学校と隠れたカリキュラム」では、学校教育におけるカリキュラム問題のひとつとして議論されてきた、隠れたカリキュラムの問題点についてまとめるとともに、進路選択への影響性とジェンダー

* 社会情報学科 教務助手

トラックとの相互関係について学習指導要領等を足掛かりに言及する。

小論「IV. 隠れたカリキュラムとジェンダートラック」では、隠れたカリキュラムとジェンダートラックの交差点により生ずる問題がどのようなものであるか、とりわけ、進路の性分化について注目しつつ、教員が受ける隠れたカリキュラムの影響性について言及する。

II. ジェンダートラックとは

大衆教育社会における青少年の進路選択は、もはやハイパーメリトクラシー（直訳では超能力主義）と呼ばれる状況下に置かれている。荻谷⁽⁴⁾によれば、学習者や進路選択者は、自身の出身階層や出身家庭における文化資本の影響を受け、それは大衆化した教育によって表面化することが明らかにされている。それに伴い、メリトクラシー（実力主義）、すなわち学歴や資格に基づく職業決定によって青少年は、新たな社会への一步を踏み出すことになる。これは、主に欧米で重宝された視点であるが、本田⁽⁵⁾は、日本においては欧米のそれとは異なった実際があるとしている。本田の指摘で特筆すべきは、人に内在する技能や知的な能力という幻想に支配されているという指摘である。画一的な偏差値に代表される実力主義（メリトクラシー）ではなく、知的側面以外の「人間力」などを評価対象とする能力主義（ハイパーメリトクラシー）という状況に今日の青少年は置かれているとしている⁽⁶⁾。

このような状況に青少年が置かれ、どのような能力を有しているのかが重視される境遇に立たされることによって、資格を有することとその教育歴は進路選択において、重要な働きをすることは否定できない。上記のような、青少年を取り巻く状況の中で重要となるのがジェンダーの問題だろう。今日の青少年を取り巻く環境について、先に示したハイパーメリトクラシーという言葉そのまま見れば、超能力主義ということになりえるが、先述した本田の思想を借りれば、人間力という言葉に代表されるように個人の保有資格に固執するのではない、より進路選択の範囲が広がった社会と捉えることもできる。しかし、本人の意思で決定づけられない産まれながらの性によって、ややもすれば、進路の「水路づけ」⁽⁷⁾がなされるのであれば、それは由々しき問題である。あわや、これが学校教育によって引き起こされているのであれば尚のことである。

その実、ジェンダートラックと呼ばれるトラッキングシステムによって性による進路選択があるとされている。中西⁽⁸⁾によれば、従来型のメリトクラティック（学業成績主義）な選抜において女子の進路選択の説明をすることはできず、ジェンダートラックにおけるノンメリトクラティック（非学業成績主義）な進路選択がなされ、社会における女性像がそのトラックを生み出す背景となり、進路選択に影響を与えている。また、中西は学校について「性役割の社会化エージェント」⁽⁹⁾であるとしており、学校とは性役割観に基づいて生徒を選抜・配分する装置であると批判している。

他方、高松⁽¹⁰⁾は、ジェンダートラックとともにそれ以前に見られたアカデミックトラックという学力と学校階層に見られる進路分化のトラッキングシステムに注目している。アカデミックトラックは、入試難易度の高低によって位置づけられるが、ジェンダートラックにおいては、主婦志向と職業志向という指標において位置づけられる。とりわけ、校種によるトラックにおいてはアカデミックトラックによるが、学習内容についてはジェンダートラックに左右される。このふたつのトラックについて、学校の校風やカリキュラムは、両者に少なからず影響を及ぼしている。このことは、中西と高松の両研究から見る事ができる。しかし、どのような学校であっても必ずその教育活動において一定の共通概念がある。それは、学習指導要領に基づいて動く教育機関であるという認識である。これらを前提として次節においては、ジェンダートラックと学校の在り方を足掛かりに論じることとする。

III. 学校と隠れたカリキュラム

1. 隠れたカリキュラムの問題とは

隠れたカリキュラムという言葉は、社会学者 P.W. Jackson の用いたヒドゥンカリキュラムという用語

として登場したと言われている。1970年以降隠れたカリキュラム研究が注目されたことで、公のカリキュラムよりも隠れたカリキュラム(ヒドゥンカリキュラム)は、ある意味では効果的であると考えられるようになった。氏原⁽¹¹⁾は、P. Bloomの考察を足掛かりに隠れたカリキュラムについて次のようにまとめている。

ブルーム(Bloom, 1972)は、「学習されるべき内容」を意味する顕在的カリキュラムと対照的な関係にある、隠れたカリキュラムがあることを論じた。顕在的カリキュラムは教育目標と深く関係し、これにより教科書が書かれ、教授要目が開発され、教授要目を教えるために教師は訓練される。そのため、「意図される学習内容」と捉えることができる。

これに対し、隠れたカリキュラムは、学校が組織される仕方や管理者—教師—生徒間の関係を通して学習される内容である。すなわち、学校組織文化や学校成員の相互作用といった、顕在的カリキュラムを学習するために不可欠な学習環境、あるいは方法を通して学習される内容である。顕在的カリキュラムと対照的な関係にあるため、「意図されない学習内容」と捉えることができる⁽¹²⁾。

また、氏原は隠れたカリキュラムの効果を念頭にいった「無意図的教育」の作用についても言及しており、顕在的カリキュラムとは対照的である隠れたカリキュラムは、高度産業社会にとって顕在的カリキュラムと比べ非常に効果的なカリキュラムであるとしている。この指摘は、先に触れたBloomの隠れたカリキュラムの有効性に裏付けされその効果がより明瞭になったものであると考える。

では、隠れたカリキュラムのなにが問題となりえるのか。それは、とりわけジェンダーの問題による。この問題については、元来、日本における教育と女性の関係がどのようなものであったかに焦点を当てる必要がある。そもそも、戦後日本教育において女性はどうに認識されていたのか。明治においては、女性も初等教育の義務化が徹底する様に政府が働きかけるようになる。しかし、この公的な動き(学制)は、欧米諸国に追いつき近代国家としての体制を整えるために徹底されたものであり、当時の国家的イデオロギーとは異なっていた⁽¹³⁾。さらに、高等教育においては入学資格そのものが認められていない状況もあり、女性においては良妻賢母、男性においては立身出世という国家的家父制イデオロギーの構築に伴ったトラッキングシステムがしかれていた。

戦後においては、表面的には女性であることが教育を受ける権利に影響するということはない。しかし、あくまで表面上である。1966年の中央教育審議会答申⁽¹⁴⁾「後期中等教育拡充整備」では、「女子に対する教育的配慮」という項目で高等教育多様化の名のもとに男女の区別を明瞭に示すことになった。

女子に対する教育の機会、男子と均等に確保されなければいけないが、その教育の内容については、女子の特性に応じた教育的配慮も必要である。そのため高等教育においては、普通科目についても、女子が将来多くの場合家庭生活において、独特の役割を担うことを考え、その特性を生かすような履修の方法を考慮する⁽¹⁵⁾。

さらに、1971年の中央教育審議会答申⁽¹⁶⁾においては、「今後の重要な課題」として次のように示している。

人間形成の問題を考える場合、回避できないものとして男女の性別の問題がある。男女が人間として平等であることはいうまでもないが、人類とその文化の維持発展のために、それぞれの特性に差異があることを認めながら、共にその可能性を発揮できるようにすること⁽¹⁷⁾。

このような一連の戦後日本の女子に応じた教育政策のもとに家庭科が女子用科目として設定され、まさしく明治に見る「良妻賢母」「立身出世」の男女観が「見える形」で国家イデオロギーとして大衆化して

いくことになる。

この一連の動向において 1980 年の教育改革、特にジェンダーフリーについて論じられた改革をきっかけに表面上フォーマルな形での男女差は消えたと言ってもよい。しかし、未だに様々な性差が存在する。その一つが隠れたカリキュラムである。特に、学校教育においては、例えば、カテゴリーの更新が追い付いていない認識を教授者である教員が持つ場合、それを体現せずとも進路選択の際に影響を及ぼし、進路選択者(生徒)の進路が「個人の意思から離れた狭められた選択肢(ジェンダートラック)」によって決定づけられてしまう可能性がある。その要因としては、「女性向け」⁽¹⁸⁾とされる言語化されていない規範によって進路の選択肢を絞ってしまい、それに対して大人(学校の進路指導部の教員並びに担任等)がその決定理由について尋ねた時、たとえ、それが隠れたカリキュラムとジェンダートラックに影響された意思決定であったとしても、これまで受容してきてしまったことが背景にあると考えられる。勿論、これに限定した話ではないが大人の存在が進路選択の際に、生徒に少なからず影響を与えることが隠れたカリキュラムの内包する学校現場にかかわる一問題と示唆する⁽¹⁹⁾。

今日、四年制大学の女子の進学率が増加しているものの、専攻領域での教育達成の性的分化は変わっていない⁽²⁰⁾。大学の進学率の上昇により女性進学者の割合は上昇しているが男性割合を未だに下回っている。内閣府男女共同企画局(2019)⁽²¹⁾によれば、進路の専攻別性分化の実態を表している。とりわけ、工学分野に関しては、昭和 50 年度実施調査では 0.9%であったものが平成 30 年度調査では 15%を記録しているが人文科学や薬学、教育などでは昭和 50 年度時点で過半数を超え高止まりし、医学、歯科、社会科学においては、昭和 50 年度には 1 割前後であったものが平成 30 年度調査では 3 割を超えている。比率で言えば、増加しているが注視すべきは専攻別性分化と言わざるを得ない結果が示されているのが実際であるということではないだろうか⁽²²⁾。

2018 年に実施された『女子生徒等の理工系進路選択に向けた意識調査』⁽²³⁾では、理数系科目の教科担任が女性の場合、そうでない場合と比べ理系タイプの女子生徒割合が高く、女子生徒の進路志向については、男性保護者よりも女性保護者の最終学歴に強く影響されることが指摘されている。また、男性保護者については、進路に関する家庭内の関与についての相関が強いとは言えず、ロールモデルとして女性保護者や女性教員からの影響を女子生徒は強く受けるとされている⁽²⁴⁾。他方、進路選択において学校教育は、今日非常に大きな役割を担っていると考える。特に多様化する高等学校においてキャリア教育の重要性が指摘されている⁽²⁵⁾。その中において、教員の性が少なからず進路選択者(特に女子生徒)に影響を及ぼすとすれば、先の調査結果も踏まえて学校教育の進路指導として見逃してはならない問題であると考えられる。とりわけ、大学進学にかかわる進路選択においては、工学に関与する女性研究者や教員が少ないためにロールモデルになりにくく進学者割合が伸び悩んでいる⁽²⁶⁾。とするならば、その要因は、隠れたカリキュラムによって裏付けされ、狭められた進路選択(ジェンダートラック)によって進路決定がなされているからであり、それを学校教育が受容してしまっているからではないだろうか。

2. 学校教育に見る隠れたカリキュラム

学校教育における隠れたカリキュラムには、大きくふたつの視点があると言える。教員が形成するジェンダー観が隠れたカリキュラムとして働く場合と学習指導要領や教科書などに内在するジェンダー観が隠れたカリキュラムとして働く場合である。

前者については、先述した松田が指摘している。松田によれば、教員が無意識に再生産するジェンダー観が学校教育に内在していると指摘している。具体的には、男女別の名簿や教室での座席、整列の際に男女別で並ぶ、グループ分けは男女別に行われるなどである。この場合、教員は男女の区別が当然と無意識のうちに考えており、自身に内在するジェンダー観を学習者に示していることになるだろう。このような教員がもたらすジェンダー観の影響について松田は次の様に指摘している。

不必要に男女で分けたり、性別で基準を作ったりすることは、人間を分ける最も基礎的な基準が性別であるというメッセージを子どもに伝えることになる。学校園で、トイレや更衣室という必要な区

別以外に、不必要な男女2分法を行ってはいないか点検が必要である。最近、都市部を中心に男女混合名簿がかなり普及しているが、2019年に九州地方の0県教育委員会が市町村教育委員会を通し、男女混合名簿を使用するように学校に通知を出した事実から推測すると、日本の地域により混合名簿の普及にばらつきがあることが分かる。

(中略)

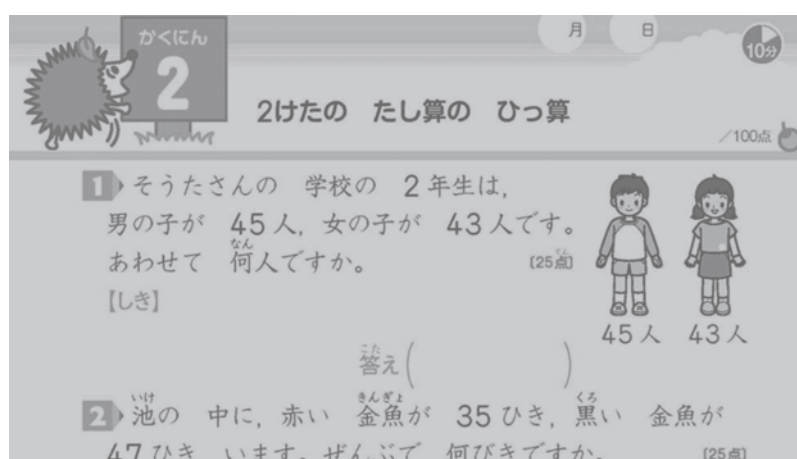
さらに、日本での学校教育は、個性を大切に指導よりも、集団としてのまとまりの成果を重視する歴史を持っているため、一人一人を大切にしない無自覚なジェンダーをチェックすることが求められる。そのためには、不必要な性別2分法を行っていないか、子どもや教師に性的役割分業が行われていないか、そのために誰かが被害を受けたりしていないかなどの視点が重要である⁽²⁷⁾。

この松田の指摘は、隠れたカリキュラムをとらえる上で非常に重要な指摘と言える。それは「不必要な男女2分法」によって、教員の意図しないジェンダー観を学習者に指し示すことに起因して、ジェンダー観の再生産が行われることの説明が可能と考えるからである。また、「不必要な男女2分法」を行っていないか留意する必要があるという指摘については、ある都道府県が男女混合名簿を導入しない理由について「健康診断の際に男女別の名簿の方が利用しやすい」また、「2種類の名簿の使用は混乱を招く」などの理由から名簿を男女別にしていると説明している⁽²⁸⁾。しかし、健康診断における男女別名簿の使用は先の松田の指摘から言えば、トイレや更衣室などと同等の必要な分類であると言える。つまり、男女別名簿そのものが問題ではなく、それが平時に使用されることに起因して隠れたカリキュラムとして作用することが問題であるとする。とりわけ、政府としての調査は行われていないが都道府県教職員組合の会報誌の一つでは、号外として2020年に「性別でわけない名簿使用状況」と題して県内の高校においては98.7%の男女混合名簿の導入率であるとしている⁽²⁹⁾。

他方で、教員が形成するジェンダー観を学習者に与える可能性が示唆できるものがある。それは、日本の教員が形成する性別割合である。管見の限り、学校教育と他の環境における指標を比較することが可能なのが、『男女共同参画社会に関する世論調査』⁽³⁰⁾である。本調査においては、70.4%が学校教育の場は男女の立場が平等であると回答している。この割合は、「政治」では9.4%であり、「社会通念・慣習・しきたり」では16.3%、「職場」では25.8%となっており、約2倍以上、項目によっては3倍以上の値であり、日本において学校は男女平等の割合が高いと捉えられていることが明らかになっている。しかしながら、学校教育の実際は異なった様相をみることができる。2024年の学校基本調査においては、幼稚園では93.4%が女性教員であるが、園長女性率は68.5%である。小学校の女性教員率は62.6%であるが、校長のそれは30.6%である。他方、中学校では女性教員率は44.8%であるが、校長女性率は16.6%である⁽³¹⁾。近年、優位に値が上昇したとされるが女性校長の割合は国際的には低いと考えられる⁽³²⁾。OECDの『国際教員指導環境調査2013』⁽³³⁾によると、中学校の女性校長率の調査国平均は49.9%であった。この結果から日本の学校において、管理職に女性が多いとはいえない環境下に学習者を置くことは、「管理職にふさわしいのは男性である」ということを伝える隠れたカリキュラムのひとつと言えるのではないだろうか⁽³⁴⁾。

つまりは、前者の隠れたカリキュラムにおいては、教員に内在するジェンダー観と組織構成に内在するジェンダー観のふたつが学習者に作用していると考ええる。

他方で、後者の教科書や学習指導要領などによる隠れたカリキュラムであるが非常にわかりやすく、かつ、先に述べた教員の構成や無意識ではないものがある。学校、学年単位に共有することになる問題集や教科書である(イラスト1)。星野⁽³⁵⁾は、学校に参与する人間が現場からの声や疑問を発信するHP“メガホン”にて、小学校教員として使用する問題集において隠れたカリキュラムの問題を指摘している。イラスト1は、星野の指摘する小学校2年生用の問題集の設問である。

イラスト 1⁽³⁶⁾

この、イラスト 1 について、星野は次の 2 点において問題視している。ひとつは、男子と女子のイラストである。男子については、短髪で半ズボンであり、青のカラーリングが被服に施されている。他方、女子については、長髪でスカートを履き、赤またはピンクのカラーリングが被服に施されている。このステレオタイプの表現については、教育社会学において、なじみのある視点と言える。しかし、特筆すべきは、星野の 2 点目の指摘である。イラスト 1 の問題は、男子の数と女子の数を合計した人数を計算させる問題である。この問題文には、人は必ず、男性か女性にカテゴライズされるものであるというメッセージが含まれているとしている。この指摘は、学校教育現場とりわけ初等教育における学習者を教育対象とするときに重要な観点であると推察する。特に、学習者自身の性自認については、いつ自認するかということも踏まえて留意する必要があると考える。

無論、共生を旗印にして様々な配慮が進んでいることは事実である。メディアに取りざたされたものでいえば、色鉛筆の「はだいろ」の名称変更や学校でのトイレの完全個室化(男子トイレの小便器の廃止)などがある。このような対応は、学校の環境のみならず教科書や授業にかかわる副教材などにも及んでいる。その点からいえば、先のイラスト 1 の問題集がどのような時期に発行されたものか明らかにしたところではあるが、注視すべきはそのような問題集が現存したことだと考える。

このような、教科書などに内在する隠れたカリキュラムは、言語的、視覚的な情報に留まらない。少し古くなるが、学習指導要領を隠れたカリキュラム問題として明瞭に批判したものがある。武田⁽³⁷⁾は、高等学校の国語科の教科書に注目し女性という存在が、教科書から締め出された存在であると指摘している。武田は、女性作者がどのくらい教材化しているのかについて「国語総合」「国語 I」の教科書を集め女性著者割合を求めている。手続きとしては、ほとんどの教科書に共通している、「随想」「評論」「小説」「短歌・俳句・詩」の 4 つの教材を分類し、女性著者割合をまとめている。その結果、「国語 I」では、14.5% 「国語総合」では 19.2% という割合に女性著者はとどまっている。この現状について武田は、女性著者が除外されている現状がありていに表れているとして、次のように述べている。

敗戦前ほどではないにしても、高校国語の現代文教材からこれまで女性が除かれてきたこと、そして 2003 年度使用の教材でも排除されているのが現状である。こうした教科書を学習者たる現在の女子高校生そして男子高校生はどう読むのだろう⁽³⁸⁾。

先の武田の指摘は、当時(2003 年)の国語科の教科書から批判したものである。しかしながら、質的な言説としてこの指摘は、学校教育に潜む隠れたカリキュラム問題として注視すべき批判だと考える。

IV. 隠れたカリキュラムとジェンダートラック

1. 隠れたカリキュラムとジェンダートラックの交差点

前節の、武田の指摘をジェンダートラックと結び付けよう。ジェンダートラックとして考えるとより明瞭になる点の一つある。それは、男性がより強調されるという点である。国語科の教科書の例を取れば、取り上げられる文豪たちのほとんどが男性である。また、教科書に登場する偉人も男性の割合が多くなる。さらには、学校という枠組みにおいて目を向けると管理職は男性ばかりで「偉い人、賢い人、は男性」であるという認識がジェンダートラックとして働き、個人の實力に左右されない(ノンメリトクラティックな)進路選択に学習者を導き、結果として進路選択の際に進路選択者(生徒)自身が進路の選択肢を限定させる可能性があるのではないだろうか。

他方で、学校は「性分業の社会化エージェント」であると先述したが、教員や国がそう働きかけることに起因して隠れたカリキュラムが働くことで、青少年の進路選択を狭めさせていた可能性は否定できないのではないだろうか。特に、前節にて述べた高等教育に段階が進むにつれて専攻別性分化がより顕著になる点については、隠れたカリキュラムとジェンダートラックの交差点として注目することができる。特に、工学関連分野への進学率が伸び悩んでいる点については、ロールモデルとなる女性が少ないことに起因して、進路選択の際に工学分野への進学を検討する生徒の割合が少ない可能性がある。一方、新たな視点としてジェンダー・イノベーションが注目され、身体的性(Sex)と社会的性(Gender)相互での研究の必要性が指摘されている。一件、隠れたカリキュラムとジェンダートラックの交差点から離れた指摘であると思われるかもしれないが、次にあげる先行研究から隠れたカリキュラムとジェンダートラックとの関係性を示唆したい。

まず、工学分野とジェンダーの問題については、先に触れたジェンダー・イノベーションの枠組みから自動車の安全性に関する検証実験について性差分析の必要性が指摘されている⁽³⁹⁾。

Londa Schiebinger⁽⁴⁰⁾は、自動車事故は、妊婦の死に伴う胎児死亡の主原因であり、時速 56 キロでさえ衝突事故での胎児の 75%に危害が及ぶ可能性に言及している。また、自動車に使用される三点式シートベルトが妊婦を想定していない設計である点について、工学分野での性差分析の乏しさであると批判している。その実、自動車の安全性に関する実験において、被験体の人形は男性では白人男性の身長中央値を参考に作成されているが、女性については中央値を下回る身長で作成されている点が指摘されている⁽⁴¹⁾。

この事態は、我々の生活に関与する非常に身近な問題であるとともに、ジェンダートラックと隠れたカリキュラムの生み出した問題としても注目することができる。内閣府男女共同参画局⁽⁴²⁾による調査では、高等教育機関における女性研究者の割合は、調査国中最下位でありノルウェーやドイツ、韓国が順調に女性研究者割合を増加させているのに対し、日本は 25.9%と最大値であるノルウェーの 46.5%の約半数という結果になっている。さらに、産業においては最大値のシンガポール 26.1%に対して、日本は 8.1%という調査国の中で唯一、数値が一桁となる結果となっている。このことから、女性研究者の割合が諸外国と比べて著しく低い日本において、先に指摘された産業における女性研究者の少なさは喫緊の問題であると考えられる。特に、工学分野における先の自動車事故の問題からも研究に関与する女性割合増加の必要性は、目に見えて明らかであると考えられる。

学校教育の立場から見れば、進路選択者、特に女子生徒については、同姓の教員がロールモデルとなり工学分野に進む女性割合が少ないことを体感し、自身で「工学は男性が多い印象だ」などとラベリングしてしまい進路の選択肢を狭めてしまうことで、工学における女性研究者割合が少ないという結果を招いてしまったのではないだろうか。逆説的ではあるが、先の自動車の安全性にしてもそれらに関与する女性の割合が多ければ、ややもすれば、「被験体の人形(女性)の身長の低さ」や「妊婦を考慮したシートベルト」などについて言及され、改良される可能性は示唆できる。小論で引用した武田の指摘においてもそうである。教科教育において、国語科を例に引用したが「賢い人」「偉い人」「男性」という隠れたカリキュラムに影響されて自身の進路選択をトラッキングしてしまうという事態は、工学分野を例に示

せば自動車の安全性に代表されるように生み出されうる問題は小さいとは言い難い。特に、進路選択においては、その先にある問題についても把握し進路選択者である生徒を指導することが、今日の学校教育とりわけ進路指導、キャリア教育において求められてくるのではないだろうか。

2. 教員が受ける隠れたカリキュラムの影響

ジェンダートラックや隠れたカリキュラムにおける問題と学習者に与える影響を検討したが、学習者へのアプローチを行う教員が隠れたカリキュラムの影響を受けている可能性もあるのではないだろうか。

教員の職務において、教授活動の基本的ガイドラインが学習指導要領であろう。この学習指導要領において、隠れたカリキュラムが示されているとすれば、教員も少なからず隠れたカリキュラムの影響を受けてしまう可能性があるのではないだろうか。学習指導要領を足掛かりとすれば、教員がどのような認識とガイドラインのもとで教授活動を行っていたのかが明らかになる。

まず、家庭科が女子専用科目として設置されたことに対しては、国家的イデオロギーが背景にある。しかし、表面上、学習指導要領において家庭科も平等に性差なく実施される様になる。学習指導要領が「男女は異なるから別学で学ぶ」という考えから「男女が異なるが共学に学ぶ」という理論が展開されたためである。1947年の学習指導要領⁽⁴³⁾では、共学化した家庭科科目について次のように示されている。

家庭科は、これまでの家事科と違って、男女ともにこれを課することをたてまえとする。ただ、料理や裁縫のような、内容が女子にだけ必要だと認められる場合には、男子にはこれに代えて、家庭工作を課することに考えられている⁽⁴⁴⁾。

この指摘から、教員は家庭工作を男子に推奨し、女子には調理裁縫を実施するという方策をとることは想像に難くないだろう。明言こそされていないが、この文言が教員に与える影響については隠れたカリキュラムから言えば、授業の構造に「性分化し型にはめる」という影響を与える可能性を示唆することができるのではないだろうか。

このような、顕著にみられる男女別に見る指導に関する知見は、今日の学習指導要領には見られない。しかし、今日の学習指導要領についても隠れたカリキュラムが内在していることは否定できない。下記は、2017年に改訂された学習指導要領の小学校社会科における具体例として取り上げられた歴史上の人物の例である。

卑弥呼、聖徳太子、小野妹子、中大兄皇子、中臣鎌足、聖武天皇、行基、鑑真、藤原道長、**紫式部**、**清少納言**、平清盛、源頼朝、源義経、北条時宗、足利義満、足利義政、雪舟、ザビエル、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、徳川家光、近松門左衛門、歌川広重、本居宣長、杉田玄白、伊能忠敬、ペリー、勝海舟、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、明治天皇、福沢諭吉、大隈重信、板垣退助、伊東博文、陸奥宗光、東郷平八郎、小村寿太郎、野口英世⁽⁴⁵⁾

この例を見ると女性の偉人が非常に少ないと言える。この事象について、当該改訂以前の指摘だが、木村⁽⁴⁶⁾は、近代以降について誰一人として女性が歴史上の人物として登場しないことを指摘している。

この具体例に示された内容について、教員がなんら違和感なくまたは、具体例のままに則って教授活動を行った場合については、先の国語科に見る隠れたカリキュラムと同様に学習者は、「有能なのは男性である」という認識を学びの中に内在させてしまう可能性があるのではないだろうか。それが及ぼす結果としては、前節の小論としてふれた専攻別性分化のもたらす自動車の安全性検証などの問題であり、「賢い人＝男性」という根拠なき規範を学習者に植え付けてしまいかねないと考える。そのため、教員はより強固に性分化について留意し、進路決定についてその理由を知る必要があるのではないだろうか。

IV. 結び

本稿においては、女性が社会で活躍するためにはどのような問題に目を向けるべきか、特に近く社会にはばたく中学校や高等学校における学習者が学校教育において受ける影響は何であるかという立場から論じること努めた。これは、女性が社会でより活躍するためにどのような問題に目を向ける必要があるのかまた、先行研究に注目しこれまでに指摘されてきた問題を個別ではなく相互に作用する可能性を示唆するためである。特に、ジェンダートラックにおいては、隠れたカリキュラムのそれに内包され、自身の選択肢を制限させる可能性について示した。これは、学校教育において無視することのできない問題であり、今一度学校教育に関与する者はこの問題を俎上にのせる必要があると考える。

今後は、歴史においてどのような認識のもとで女性と教育が論じられてきたのかに注目し、より詳細に分析することで新たな方向性を検討することにした。特に、学習指導要領における歴史上の人物の具体例や高校の国語教育における女性著者の存在など現行の学習指導要領や教科書からどのような様相を窺い知ることができるのかを明らかにし、本稿では深堀できなかった男子生徒が進路選択を行う際に影響されるロールモデルはなにであるかなどにも注目し、隠れたカリキュラムとジェンダートラックをより精緻化する意味において明らかにする必要があると考える。

(1) 荻谷(2008)による。教育が広く大衆に開かれた社会を言い、学力格差を表面化させる性格を有する。

荻谷剛彦,『学力と階層』,2008,朝日新聞出版。

(2) 「高等教育とジェンダー」という内容を日本の文脈で考えると、従来問題とされてきたのは男性に比べて女性が四年制大学(四大、あるいは単に大学)に進学しにくい傾向だった。日本では女性は歴史的に短期大学(短大)に進学する傾向があり、「男子は四大、女子は短大」という性別によって高校卒業後の進学パターンが異なる点が、長く議論されてきた。

東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター,『高校生の進路選択とジェンダー：高等教育の多様性に注目して 研究成果報告書』,2021,東京大学。

(3) 赤松千春,「商業教育の変遷と現状」『横浜商大論集』51巻2号,2018,pp.207-221。

(4) 荻谷剛彦,『大衆教育社会のゆくえ』,1995,中央公論新社。

(5) 本田由紀,『教育は何を評価してきたか』,2020,岩波新書。

(6) Ibid.

(7) 伊佐(2021)による。高等学校とりわけ、難関とされる学校卒業者も「女性向け」とされる進路が明らかにされている。

伊佐夏実,2022,「難関大に進学する女子はなぜ少ないのか」『教育社会学研究』109,pp.5-27。

(8) 中西祐子,「ジェンダー・トラック——性役割観に基づく進路分化メカニズムに関する考察」『教育社会学研究』第53集,1993,pp.131-154。

(9) Ibid.

(10) 高松里江,「進路選択におけるジェンダー・トラック——男女間・女子内の分化に着目して」『理論と方法』37巻,2号,2022,pp.170-183。

(11) 氏原陽子,「意図的な隠れたカリキュラム」『名古屋女子大学紀要』59巻,2013,pp.149-159。

(12) Ibid.

(13) 松田智子,「ジェンダーを巡る隠れたカリキュラム」『人間教育』3巻2号,2020,pp.61-66。

(14) 中央教育審議会ホームページ,(2024,7,28,https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/661001.htm)

(15) Ibid.

(16) 中央教育審議会ホームページ,(2024,7,28,https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/710601.htm)

(17) Ibid.

(18) 伊佐(2021)による。

- 伊佐夏実, 2022, 「難関大に進学する女子はなぜ少ないのか」『教育社会学研究』109, pp.5-27.
- (19) 統計上, 例えば, 短期大学の女性進学者の割合が減少し幾分も経過している為, 本文の意の水路づけとして作用しているか否か疑問符を持たれるやもしれない, 今日教育関係者すべてが進路選択における本稿等の内容を知りえているという確証が持てない限り, 進路選択の一問題としてカテゴリーの更新が追い付かないことが進路選択に及ぼす影響性は否定できない.
- (20) 氏原陽子, 「隠れたカリキュラムによるジェンダー・メッセージの伝達に関する研究」『名古屋女子大学紀要』57 巻, 2011, pp. 151-160.
- (21) 内閣府男女共同参画局, 『令和元年度版 男女共同参画白書』, 2019 (2025, 1, 10, https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r01/gaiyou/pdf/r01_gaiyou.pdf)
- (22) 医療系分野への進学率上昇について, 看護学部が設置されたことにより女性比率が上昇した点については, 特に私立女子大学の学部の歴史的変遷という視点からも研究が行われており, 注目できる背景であるが本稿においては記述するにとどめる.
- (23) 内閣府男女共同参画局, 『女子生徒等の理工系進路選択に向けた意識調査』, 2018, (2025, 1, 10, https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/girls-course_h29.pdf)
- (24) 当該報告書で男子生徒については, 女子生徒ほどのロールモデルからの進路志向の影響は報告されていない.
- (25) 川合宏之, 「多様化する高等学校とその課題——生徒に『生きる力』をつける教育」『流通科学大学論集—人間・社会・自然編』第 32 巻 1 号, 2019, pp. 1-11.
- (26) 必ずしもそれに限らない. それ以外の要因に加え, 理工系企業で働く女性のロールモデルを示せていないことも一要因とも考えられる.
- (27) 松田智子, 「ジェンダーを巡る隠れたカリキュラム」『人間教育』3 巻 2 号, 2020, pp. 61-66.
- (28) 東京新聞 2022.3.20 『特集ジェンダー平等ともに』, (2025, 1, 10, <https://www.tokyo-np.co.jp/article/166670>)
- (29) 佐藤淳一, 2020, 岩手県教職員組合『岩教新聞』号外(2025, 1, 10, https://www.iwakyoso.gr.jp/library/01_kenri_data/aruaru05.pdf)
- (30) 内閣府, 『男女共同参画社会に関する世論調査』2024.
- (31) 先述の, 松田が指摘している 2016 年調査と比べて比率は, 上昇したにせよ依然としてその割合が, 女性比率に対しての管理職割合は統計上も優位に大きいとは言い難い.
- (32) とりわけ, 中等・高等教育において.
- (33) 文部科学省ホームページ, (2024, 7, 28, https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/Others/1349189.htm)
- (34) 勿論, 女性管理職割合が上昇している所ではあるが, 過去においては賢慮に女性管理職の少なさを伺わせる境遇は, 少なからず現在にも影響を与える可能性があるかと推察する.
- (35) メガホン公式ホームページ, 2023, (2024, 7, 28, <https://megaphone.school-voice-pj.org/2023/09/post-3961/>)
- (36) Ibid.
- (37) 武田憲幸, 「高等学校の国語教科書にみられるジェンダー問題」『日本ジェンダー研究』6 号, 2003, pp.13-26.
- (38) Ibid.
- (39) 佐々木成江, 2023, “ジェンダード・イノベーション(GI)”お茶の水女子大学ジェンダー・イノベーション研究所(2025, 1, 10, <https://ocha-igi-mag.jp/articles/gendered-innovations/>)
- (40) Londa Schiebinger, 2017, 「自然科学, 医学, 工学におけるジェンダード・イノベーション」小川眞里子: 訳, 『学術の動向』22 巻 11 号, pp. 12-17.
- (41) 佐々木成江, 2023, “ジェンダード・イノベーション(GI)”お茶の水女子大学ジェンダー・イノベーション研究所(2025, 1, 10, <https://ocha-igi-mag.jp/articles/gendered-innovations/>)
- (42) 内閣府男女共同参画局『理工系分野における女性活躍の推進を目的とした関係国の社会制度・人材育成等に関する比較・分析調査報告書』(2025, 1, 10, https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/riko_comp_02.pdf)
- (43) 文部科学省, 1947, 『学習指導要領 家庭編(中等学校第四, 五学年用)(試案)』
- (44) Ibid.
- (45) 文部科学省, 2017, 『小学校学習指導要領』

- (46) 竹内常一，子安潤，木村涼子，阿部昇，加藤郁夫，小野政美，吉永紀子，鶴田敦子，松下良平，藤井啓之，寺島隆吉，金馬国晴，新谷恭明，『学習指導要領を読む視点』，2008，白澤社.

Abstract

This paper examines the impact of gender tracks and the hidden curriculum on learners, based on previous research. The findings suggest that these factors are interconnected rather than independent. Specifically, hidden curricula include elements reproduced by teachers and those inherent in learners, influenced by learning guidelines and educational materials. Meanwhile, gender tracks become apparent as learners undergo the hidden curriculum, potentially guiding career choices based on their innate gender.